

近代ハ實ニ不然、然レバ末代ニハ諸道ニ達者ハ少キ也、實ニ此レ哀ナル事也カシ、蟬丸賤キ者也ト云ヘドモ、年來宮ノ蟬給ヒケル琵琶ヲ聞キ、此極タル上手ニテ有ケル也、其ガ盲ニ成ニケレバ、會坂ニハ居タル也ケリ、其ヨリ後盲琵琶ハ世ニ始ル也トナム、語り傳ヘタルトヤ、

〔續世繼志六賀のみそぎ〕二のみこ子鳥羽羽は、御めぐらくなり給て、おさなくてかくれ給にき、

〔今物語〕八幡の袈裟御子が、さいはいの、ち、打つゞき人に思はれて、大菩薩の御事をまゐらせざりければ、若宮の御たゝりにて、ひとり持たりけるむすめ、大事にやみて、目のつぶれたりけるを、こと祈りをせず、むすめを若宮の御前にぐして參りて、ひぎのうへに横ざまにかきふせて、おく山にまをるまをりは誰がため身をかきわけてうめる子のため、といふ歌を、神歌になくなくあまた、びうたひたりければ、頓て御前にて、やまひやみ目もさはく、とあきにけり、

〔發心集八〕盲者關東下向の事

あづまのかた修行し侍りし時、さやの中山のふもと、ことのさきと申やしろのまへに、六十ばかりなるびわ法師の小ほうしひとりぐしたるが、過ゆくをよびとゞめて、かれないひくはせて、いくへゆくぞよのつねの人だにはるかなる旅、思ひたつ事は、たとくしきをいと心ぐるしくこそとぶらへば、うなだれて鎌倉のかたへまかり侍るなり、人はたのむところありて、うたへをも申さん、もしは御かへりみをかうぶらなど思ひてこそ思ひたつ事なれど、をのれは何事をかは申さん、ことわりかうふるべきうれへもち侍らず、さらに期する事なし、たゞ世のすぎがたさに、もし一日もすごすばかりの事もやかまへらるゝとて、あらぬありさまにてまかれば、道のあひだのくるしみ、ゆきつきてやどるほどのわづらひたゞおぼしやれといふ、いかに事にふれて苦しからんといをしき中にも、或智者のごくらくへまうでん事を申とて、無智の者のむまれん事は、たとへばめしひのみちをゆかむがごとし、なやうげうの心をしれる人は、目ある